

働きすぎ黒書 ニュース

全日本教職員組合（全教）生権局

2006年10月19日

東京都千代田区二番町12-1 3F

女性たちの叫びが届きました。

その1

人間業ではない！

冬でも毎朝5時半起き。子育て真っ最中の私には、いつも「今、しておかなければならないこと」が山積している。

5歳と2歳の子どもは、夫が保育所に送ってくれるが、朝ごはんのしたく・洗濯・保育所にもって行かせる物の用意を同時進行にこなしている。7時に子どもを起こしてからは、人間業ではないようなバタバタが続く。8時35分始まりの職場に滑り込むのは、1分前。職場の真ん前にも公立の保育所があるのだが、土曜が休みで延長も短くて話にならなかったため、夫の職場に近い私立を選んだ。お迎えは私で、たいてい6時過ぎ、延長のぎりぎりになることも多い。帰宅後はすぐに夕食の支度、子どもの世話、もちろん夫の方が帰りが遅いので夜はあてにできない。子どもが寝た後で家事に区切りをつけ、睡眠時間を削ってやっと持ち帰りの仕事が始まる。

比較的小規模な養護学校に勤める忙しさは、子どもに手がかかる時期だから、というだけではない。養護学校の教育活動は、ほぼ手作りで進んでいく。個々の生徒の実態にあわせた教材づくりや授業の計画、評価の出し方など、実践と反省の積み重ねで進むのだ。生徒が帰った放課後、複数の担当者会議が持たれ、チームで話し合われた方針にそって次の活動が準備される。事務仕事は持ち帰らざるを得ないし、教材の準備も時間が足りない。

それなのに、99年から職員の定数が減り、04年にはまた大きく減ったのだ。生徒が少し減ったからといっても、もともと小規模校なので、職員ひとりにかかる仕事の量は多い。その分をさらに少ない人手でカバーすることには限界がある。

子育て中の職員は私だけではない。みんな家族と仕事のために毎日がんばっている。自分の体は二の次、三の次だ。せめて子どもが病気にならないことを祈っているが、伝染病で保育所を一週間も休まなければならないときなどは、はっきり言ってお手上げ状態だ。

その2

苦悩のなかで！！

「おちつきにくい子ども達」をどう育てていくか、職場のみんなの苦悩の中で、転勤しての1年目が終わりました。

小学校の統廃合に伴い、学校の半数近い子ども達が入替わり、クラス数が増えました。教職員も倍近く増え、あわただしく新学期が始まりました。地域でも様々な意見があったのですが、行政は押し切ってしまいました。

ゆれる子ども達とゆっくりかかわりあえる時間がとれないまま、「特色ある学校」作りに伴う行事、到達度調査という名目の学力テスト、パソコンや1年生からの英語（英語特区）の授業等、次々とおろされてくる施策にとまどいました。そのうえ、校区の選択制も導入されて、登下校の安全確保に今まで以上の配慮が求められ、毎日が時間に追われて過ぎていきました。

子ども達のイライラ、父母の不信感は、教育の困難さを加速させています。「評価・育成システム」の導入は、教職員集団の分断をすすめようとしています。そんな中であって、自由に語り合える仲間・いっしょに「おかしい」と言える仲間がいて、組合がある。それが支えとなっていて、しんどくても、また1年がんばろうと思えるのです。

その3

数字では測れない！

公立高校教員として夫と共働きをし、核家族の中で子育てもしてきました。保育園に入れば延長保育時間とたたかい、小学校に入れば学童保育の新設に奔走し、まさしく怒涛のような十数年でした。ようやく子どもが一人で過ごせる年齢になったと思った頃から、教職員の働き方を巡って、世論が厳しくなりました。数字ではその成果が測れないことの多い生徒指導に時間を割けば割くほど、家庭に持ち込むのは、やりきれなかった書類と疲れとグチばかりです。「47分授業8分放課（休憩）毎日7限」という、急き立てられるようなパターンの毎日です。その狭間のようなスキマの時間まで会議や指導がはまりこみ、「人間やればこんなに詰め込んで仕事をやりきれものだなあ」と逆に感心しています。夫の勤務校では教頭が職員室で倒れ現職死する中、過重な負担がのしかかり、今年度だけでも職員が何度も学校から救急車で搬送されています。良心的な教員は、一人一人違う生徒たちにじっくり向き合ってやりたいと思いながら、時間的余裕のなさに苛立ち、結局自分のための時間を食い潰してやりくりしています。教育は未来を育てる尊い仕事だと自負すればこそ何とか続いています。が、「教員は夏休みもあって、楽をして給料は保障されている」と思われている悔しさはどこでどう解消できるのでしょうか。